

渋谷論文「覇権主義国家・中国とどのように戦うか」を読んで

大谷美芳(2022.03.31)



①いい中国論だ・同意できると思いましたが……

中国を「大国主義・覇権主義」、「戦争の震源地」と批判するのはいい。「香港の民主化運動の殲滅を許さない・台湾の独立運動を断固支持する・中国の台湾侵攻を阻止しよう」という立場もいい。

しかし、覇権主義、つまり帝国主義の政治的上部構造だけの批判に止まっていて、経済的土台である独占資本主義に対する批判がないの

ではないか(ブンド統一委員会『戦旗』3/20号がそう)、と思いましたが、ところが、そうではなかった。

「国家独占資本主義段階の後進資本主義＝キャッチ・アップ資本主義」、「国独資こそ経済的キャッチ・アップの源泉であり指導部が指導部として君臨できる物的根拠」。これは、ソ連や中国の官僚制国家資本主義は、台湾・韓国・ASEANの開発独裁と並び、20世紀の後発資本主義(後発帝国主義に発展)である、ということ。ここまではいい。しかし……



②立場が民主主義 文化大革命の破綻を総括して社会主義の立場に立つべき

「日本のブルジョアジーは、気分に基づく米国民民主党嫌いを改め、長期的視野に立った日米関係の構築に励まねばならない。……中国はすでに台湾侵攻の機会を窺っている。」

「専制主義と民主主義の闘争」という論理に同調し、帝国主義の覇権闘争における一方＝中国・ロシアには反対するが、他方＝米国・日

本・西欧には同調することになっている感じです。

なぜ、そうなるのか？ どういう立場で中国を批判しているか、の問題でしょう。

「……資本主義の生命線である価値の普遍性＝平等の仮象性＝法の下での平等が歪められ……否定……され、正常な競争が阻害され資本主義の正常な運営が保障されない……。」

「資本主義が生み出し、不断に再生産している民主主義の概念による一つの中国の実現であれば、それが中国主導であってもよいのである。」

国家資本が私的資本を政治的に支配し、経済的自由競争が阻害されている、という批判です(中国は官僚制国家資本主義であるが、ソ連と違って市場経済に転換しているのだが)。これは民主主義の立場からの批判です。

社会主義の立場からは、官僚が国家所有の生産手段を事実上所有して階級化し、労働者階級を支配し搾取している(後に市場経済で出現した私的資本と共に)、という批判であるべきで

す。

文化大革命の破綻は、社会主義革命の破綻でした。国有化(集団化)の後、官僚が台頭し専制的に管理した。それに対して、官僚を統制し、やがて官僚に取って代って管理する、こういう労働者階級の階級闘争を組織できなかった。「私心と闘う」といった観念論と主観主義および官僚に対する打撃主義で破綻した(天安門事件後に官僚制国家資本主義化)。



③民主化を達成した台湾人民の闘争を重視すべき

「……中国内部での階級闘争を組織しない限り民主主義革命は達成されることはない。……中国内部の反腐敗闘争や、反独裁闘争などの発展によってしか、台湾の民主主義の発展はない……ゲリラ戦が成立する条件が今はない……。」

当面する中国革命は、民主主義ではなく、社会主義革命です。ただ、その過程で、プロレタリア階級の階級闘争と被抑圧少数諸民族の民族闘争が民主化を達成することはありえます。

実際、台湾・韓国の人民は民主化を達成しました。

台湾人民は民主化をエネルギーに、中国に対する反併合・主権と独立の防衛を闘うでしょう。ゲリラ戦が成立する条件も、台湾人民の闘争が中国人民の闘争を支える関係もあるでしょう(ウクライナとロシアの関係)。それをもっと重視すべきです。